



Giegerich, W.の思考における論理と身体

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005304

Giegerich, W.の思考における論理と身体

川原 稔 久

1. 問題と目的

本論文の目的は、こころ (Psyche) の論理 (Logic) としての心理学 (Psychology) を厳密に掴む試みを提出したギーゲリッヒ (2018/1998) の論理を借りながら、そこに身体論理を掴むことである。それと言うのも、ギーゲリッヒ (2018:362) は、知ることが『『身体的な』『残酷な出来事』であり、真に決定的な変化である』と述べるように、こころの実際的な現象に衝迫のインパクトをもってわれわれが襲われるときのリアリティを出発点として、優れて身体的な素材から論理を掴んでいるからである。言わば、リアリティに触れた身の熱さを冷ます論理を掴むかのように筆者には感じられる。

ここで、掴む、ということは、考えるという行為のなかで論理の操作の対象や素材、媒体となる概念のドイツ語 Begriff の動詞 begreifen、英語で言えば、grasp、ということである。そして、ギーゲリッヒは掴むこととしての考えることとそのうえでの概念を重視している。ギーゲリッヒ (2018:340) は「概念とは能動的な把握」であると述べている。つまり、ここで掴むという表現を用いるということは、考える行為や知る行為には身体基盤があり、それが手で物を掴むということにあり、掴む身体行為のなかに、知ることや考えることの論理とともに、身体論理が働いているのであり、もう少し突っ込んで言えば、知る行為や考える行為が身体のできごとであり、思考に身体論理を把握しようという、筆者の主張の反映である。

そこで、本論文では、ギーゲリッヒの論考の出発点として、最近邦訳された主著『魂の論理的生命 心理学の厳密な概念に向けて』(2018/1998) のなかで取りあげられている、アクタイオンとアルテミスの神話の心理学的解釈を中心に、リアリティに論理を掴むギーゲリッヒの掴み取りを借りて、身体論理を掴む試みをする。なぜ神話なのかと言え、こころがインパクトを受けてリアリティに襲われる現象のなかでも、神話や昔話、説話、民話など長年伝承されてきた物語りは、多くの人々に長い時間語り継がれてきたという意味で、こころの本質が個人と時間を超えて普遍的に現象している素材であるということであろう。ギーゲリッヒ (2018:254) はそのことを、神話は「不問の真理として到来した」、と述べている。

以下では、ギーゲリッヒが神話を取りあげる際の枠組みをまずは次節で取りあげて、その後の節でアクタイオンとアルテミスの神話に関するギーゲリッヒによる心理学的な解釈の論理を議論する。

2. ギーゲリッヒによる枠組みについての物語

(1) 槍を投げること

ギーゲリッヒ (2018:1) は、序文において、次のようなアイスランド民話を素材に方法を論じ始めている。

アイスランドに一人の引きこもりの若者を主人公にした古くから伝わるお話がある。この話のなかで、母親は息子の様子を見るに見かねて、辛辣な言葉で彼を奮い立たせようとする。そして、ついに母親の思いが届き、その若者は長い間腰を下ろしていたストーブの後ろから立ち上がる。自分の槍を手に取り家を出た彼は、槍を力の限り遠くに投げ、その槍が突き刺さった地点まで走ってそれを取りに行く。さらに、その新しい地点から彼は再びできるだけ前方に槍を投げその後を追う。彼はこのことを繰り返した。このように、この若者は、自分が槍を投げた後それに追いつかねばならない。彼は、これら文字通りの「投げ出し (projections)」によって居心地のいい家から外側の世界へと向かう道を自ら作り出したのだ。

この投げ出しというやり方に倣おうと言うギーゲリッヒは、この投げ出しに困難な道を切り開くプロジェクトの二つの論理を見出す。一つは自分の居る地点よりも前方の未踏に「とりあえず顧慮することなく」まず投げ込むことである。もう一つは投げ込んだ地点に後から追いつくことであり、追いつくのは後からということである。この投げ出しについて、誰が何をどう投げ込むのかとか、投げ込むこと自体が果たしてふさわしいのかとか、それらについては後から追いつくとする。このギーゲリッヒの無謀さは、端から彼の戦術であり戦略でもある。それは、引きこもっていること自体に無自覚である心理学のより複雑な危機状況に立ち向かうためである。

しかし、身体論理では、思考や思惟の論理とは異

なり、一気に飛躍することはない。常に身体の限界という具体的な現実根差さざるを得ない。具体的には、おそらくreject 拒否か引き戻しであろうか。永く引きこもっていたのであれば、なかなか腰は上がらないし、槍を持つ力も弱ければそれを投げる動きも鈍いであろうし、それ程飛ばない槍の距離も引きこもっていた身には足どりも重くて遠いかもしい。それ以前に、母親の思いが届くのか、仮に届いたとして事態は動くのであろうか。思考の論理における飛翔の軽さと対比して、身体の論理の重たさが際立つと言えようか。その延長に想定されることは、思考論理は次から次への進行や展開を前提としているのに対して、身体論理は次々と進行し展開するよりもむしろつねに身体という限界の原点に立ち帰らざるを得ない論理であるということである。

むしろこのお話が、古いのかもしないし、今のこのころのあり方に衝迫、インパクトを与えるリアリティをもたないのかもしない。ギーゲリッヒは、自らの方法を倣うのになにゆえこの民話に惹かれたのであろうか。投げ出しprojectionが、母による思いを取り入れintrojectionの結果であるという、抜け出せない引きこもりの構造に対して、無謀であることが必要なのであろうか。

(2) 感染症

ギーゲリッヒは、誰でもこのころを知っていると前提していることに疑問を呈し、今のこのころのあり方に向き合うことで今のこのころのあり方の枠組みが変容し、「新しい、あるいは他の人格」になると心理学を行うことが出来るとする（ギーゲリッヒ 2018:16）。カフカの『掟の門』の寓話では、誰でも入門できると考えていた門は自分がバラバラに分解する死をもっても入門可能とは限らないし、聖書にある王家の婚宴のお話ではふさわしくない服装の者は式場から叩き出される（ギーゲリッヒ 2018:13-14）。しかし、その点に関して最もインパクトのある語りは以下に示す感染症の例である（ギーゲリッヒ 2018:29-30）。

ゼンメルヴェイス以前の医師が、自分たちもち込む病原菌に対する配慮なしに患者のところへ赴いたのと同じように、知性の領域において、心理学は、自らが扱う個々のトピックにアプローチする際の意識の論理的なステータスに関しては完全に無意識であり無関心である。心理学は、個人としての治療者が患者の分析を行うことを許されるのに先立って、広範な個人分析を体験すべきで

あるということ学んできた。けれども、医師が自らのもつ感染源から患者を守らなければならないのと同じように、心理学は、自らのもつ精神の枠組みの知的な意味での不適切さから心理学的現象を守らなければならないということまで学んではこなかった。その論理的な前提やモデルの最低限の精査もしないままに、心理学はいわば、ちょうど協道に逸れるように、主題の探求に邁進するのである。前もってあるはずの知的な意味での「手洗い」もなければ、「消毒」もない。

ここでも思考の論理と身体の論理を対比すると、興味深い前提が浮き彫りになると思われる。思考の論理では、感染症の感染源が病原菌であると同定出来ることが前提なので、手洗いも消毒も可能な対応として考え得るものであるし、思想上は、精神の枠組みの知的な不適切さから心理学現象を守る手洗いも消毒も、想定可能であろう。その前提となっている機械論的な身体観は、身体の論理から言えば、ひとつの見方に過ぎず、感染の排除が可能かどうか以前に、そもそも病原であることが身体にとってどのような現実的な意義をもつのかということや、精神的な枠組みが知的に不適切であることとはどういうことなのか問われることになるであろう。そのことがその後展開されたギーゲリッヒの論考作業でもあるので、先に槍を投げておいて後からそれに追いついて槍を回収するというやり方なのである。

(3) 心身症

ギーゲリッヒは、このころのリアリティを実感していることが出発点であり、心理学が、条件や前提に縛られることなく開放されていてその意味で絶対的に普遍的な心理学である為には、このころのリアリティに関与するところの命のうち、論理という生命に概念を通して追いつくことが必要であると考えている。つまり、ギーゲリッヒにとって心理学の対象であるところは、論理的生命という概念となる。言い換えるならば、このころを心理学するならば、このころの論理が対象であり、その論理は概念を媒体として追いついて掴む、ということであろう。その説明のために、心身症を取りあげてこのころの働きに関するカテゴリとその次元について位置付けをしている（ギーゲリッヒ 2018:61）。

つまり、心身症の症状である行為や身体状況はそれが内面化され心理学化されると情動として位置付けられ、情動はそれが内面化され心理学化されるとイメージとして位置付けられ、イメージが内面化され心理

学化されると概念として位置付けられる。この背景にはヘーゲルの止揚と概念の考え方があり、止揚とは、保持しながら考えて概念レベルへと押し上げること（ギーゲリッヒ 2018：376）であり、概念とは主体が向き合う知覚や表象の内容ではなくて、その内容に追いついて主体が考えることで生きて掴むことである（ギーゲリッヒ 2018：60, 375）。それを踏まえると、心身症の症状である行為や身体状況は止揚されると情動となり、情動は止揚されるとイメージとなり、イメージが止揚されると概念になる、という位置付けである。

ここで、心身症を取りあげそれについて語ることが全体的な枠組を語ることでありということ自体、思考の論理と身体論理の関係が明確にされる必要があることを示していると思われる。そのうえで、後から追いつくことが二つの意味で使われていること、つまり思考が先にあって身体が後から追いつくことと、身体が先にあって思考が後から追いつくこと、この二つが同時に為されていることが確認できる。

(4) 猫と蛇

思考と身体との輻輳性や同時性、二重性について、上と下とを繋ぐ垂直性という観点と、外せない接点という観点でギーゲリッヒ（2018：71-72）が取りあげるお話が以下のゲルマン神話である。

ゲルマンの神トールがあの世界の鬼と巨人の領域ウトガルドに旅をして、ウトガルドの王ウトガルド・ロキの大広間に入ってゆくと、王と従者の巨人たちは、トールが小さいからと小馬鹿にした対応をし、トールに自分の力を示すように要求する。トールの桁外れの強さはよく知られていたが、それでも自分の従者である巨人たちにはかなわないということを見せつけたかったからだ。トールが与えられた課題の一つは、王の猫をもち上げることだった。トールは猫の腹の下に手を入れてつかみ、全力でもち上げようとしたが、背中がアーチを描いただけで、頭と肩は地面に付いたままだった。二度目の試みは、一本の足だけはようやく地面から離すことができたが、結局、失敗に終わった。翌朝、王はお別れを言うために領地の境までトールを見送りにやって来た。そこで王は、あれほど簡単そうに見える課題をトールがどうして成し遂げることができなかったのか、その理由を明かした。そこにはトリックがあった。トールが欺かれて猫だと思い込んでいたのは、実

は世界全体を取り巻いているミッドガルド（中つ国）の蛇の一部だったのである。大広間にいた王と巨人たちはその蛇のことをわかっていし、トールがその蛇を大地から引き剥がし、もう少しでウロボロスの輪を壊すところだったのを目の当たりにして、たいそう恐れおののいたというのだ。そんなことにでもなれば、破滅が訪れていたからである。

ギーゲリッヒによれば、現実は無限の超越的な領域と垂直的な関係で繋がっているのであって、それを引き剥がしてしまうことは破滅であり、有限の現実と無限の超越的な領域の二つは引き剥がされず接していなければならない。有限世界はその背後に垂直的に無限世界を配し、無限世界はその一部を有限世界に接していなければならない、この矛盾した世界の同時存在がこころの現実性であり、そのこころの矛盾した同時存在である現実性を保つことができるのが、思考の論理である。そこまで思考の論理に囲い込まれると、身体論理も論理のウチとして、身体は思考に回収されそうである。しかし物語のリアリティは優れて身体的出来事のうちにあり、そこには身体論理が働いていると思われる。

つまり、ここまでみてきたように、議論の枠組でははじめから、考えることと身体のこととは差異がありつつ同一であるべきで、同一であるべきなのは、一方で出発点であるこころのリアリティが単一であり、他方では学として一貫性を要求するからであろう。そうなると、リアリティに含まれる多様な契機が、たとえば身体という契機も、単一性に回収されてしまうのではないか。以下の神話に見出される契機にもその多様性を、とりわけ身体論理と契機が見いだすことができるのではないと思われる。

3. アクタイオンとアルテミスの神話

こころの現実性の衝迫、インパクトをもつ物語としてギーゲリッヒ（2018:145）が取りあげるアクタイオンとアルテミスの神話は以下のものである。

若者アクタイオンは狩りに出かけ、ニンフたちと沐浴している女神アルテミス（ディアナ）に偶然出くわす。オウイディウス（『変身物語』）によれば、アルテミスが「いつもの池で沐浴をしている最中、仕事を終えたカドムスの甥が、不確かな足取りで見知らぬ森をさまよって歩こうと、気づくと聖なる小さな木立のなかにいる - 運命の仕業

か。彼が洞窟に足を踏み入れ、泉から立ち上る霧に近寄った途端、ニンフたちが胸を隠す姿が視界に入る。彼女たちは裸だった。そして木立のなかに彼女たちの悲鳴が響きわたる。ニンフたちは円になってディアナの周りを取り囲んだが、女神はニンフたちよりも背が高く、頭と肩がすっかり出てしまった。…彼女は水を汲み上げるや、彼の勇ましい顔に浴びせかけ、髪の毛に仕返しの水をぶちまけた。…さらに、彼女は濡れた頭に長命の鹿の角を授けたのである」。鹿になった今、アクタイオンはもはや猟犬たちに主人と認知されない。犬たちはアクタイオンに立ち向かい、バラバラに噛みちぎってしまう。

ギーゲリッヒ (2018: 289-290) はこの神話に六つの契機を見出している。それは、狩りをする事あるいは狩人であること、見知らぬ森に足を踏み入れること、裸の女神に出会うこと、一頭の鹿に遭遇し殺害したこと、鹿へ変身すること、自分の猟犬たちにバラバラに引き裂かれること、の六つの契機である。

(1) 狩りをする事

ギーゲリッヒ (2018: 291-292) は、狩りをする事についての論理として、他者への志向性、未知のものへ迫って認識する欲望とコミットメントの直接性を導き出している。確かにテーマや主題は狩りをする事かもしれないが、しかし、神話の語りにより忠実であれば、若者アクタイオンは仕事を終えている。つまり彼の身体は狩りの後である。身体の論理で言えば、狩りをする身体ではなくて、狩りを終えた後の身体である。なぜこの違いが生じるかと言えば、思考の論理は初めから狩りを思考しているからである。思考は初めから狩りに向けて飛ぶことができるからである。他方で身体の論理はあくまでも語りのリアリティから飛ぶわけにはいかない。それが身体の論理である。

(2) 森に入ること

見知らぬ森に足を踏み入れることの論理について、ギーゲリッヒ (2018: 294) は、他者性に自らを晒すこととして、未知に自分を晒すことと未知によって自分が囲まれることを導き出している。確かに思考の論理では未知と自分の主題であろうことは確かである。

しかしながら、身体の論理ではそれに加えて、いくつかの契機が伴う。アクタイオンの身体は既に森に踏み入り狩りを終えていて、未知に自分を晒す緊張感と未知に取り囲まれている緊張感に晒され続けた挙句、

むしろ不確かな足取りであることやさまよい歩くうちであることが、語りでは強調されているのではない。つまり身体の論理では、不確かな足取りでさまよい歩いている最中の身体なのである。それゆえに「運命の仕業か」聖なる木立のなかにいる身体に後から気づくのである。身体のリアリティはむしろ、狩りを終えた後のさまよいでハッと気づく瞬間の方にある。さらに、単に森に入ることだけでなく、聖なる木立には、洞窟があり、泉があり、泉から立ち上る霧がある。身体の論理では、そこに踏み入れ近寄るのであるから、疲れのさまよいの果てに内奥に迷い込むのである。

(3) 裸の女神に出会うこと

裸の女神に出会うことについて、ギーゲリッヒ (2018: 330) は、絶対的な真理に実際に出会うこと、他者の最も内奥にある真理の啓示として真理に出会うこと、生命に浸かることを導き出している。ここで言う真理とは、偶然に実際にそうである世界や生命のことだ、とギーゲリッヒ (2018: 322) は述べている。この裸の女神に出会う前に、身体は、裸のニンフたちの振る舞いを目の当たりにし、彼女たちの悲鳴を聴く。悲鳴が響き渡った瞬間に身体は悲鳴に貫かれていることになる。そして背が高く顔も肩もすっかり出てしまった堂々たる女神に出会う。つまり、身体は、さまよいの果ての迷い込みの挙句、貫かれ圧倒される。おそらくは身動きが取れない。

(4) 殺害と顕現

神話には直接語られていないが、一頭の鹿に遭遇してそれを殺害したことを一つの契機として、ギーゲリッヒは挙げている。これはギーゲリッヒ (2018: 334) が想定した契機であろう。その証左は、裸の女神に出会うという第3に挙げた契機の後に、この殺害という契機を挙げていることにある。なにゆえギーゲリッヒはこの契機を想定して後から掲げたのであろうか。既に筆者が指摘したように、アクタイオンは狩を終えたあとであった。つまり、殺害は、女神との出会いの後から、その顕現との関連をギーゲリッヒが想定した契機なのであった。神話の物語の最初から、本来は、殺害後の身体としてアクタイオンを掴む必要があると思われる。

ここでの論理は、殺害と真理の顕現との同一性として、他者を理解することとして導かれている。人間が真理へ参入することが殺害であり、それが女神が正体を顕わした事として、自己投企による他者開示としてまとめられている。身体の論理としては、直接語ら

れていないために、何も言えない。と言うよりもむしろ、思考の論理の独壇場である。先取りして考えることもできるし後から付け加えて考えることも可能な思考の跳躍性である。ただしその分だけリアリティに欠ける論理である。

(5) 鹿への変身

鹿に変身することについてギーゲリッヒ（2018：354）は、雄鹿でもある女神ディアナが鹿の角を授けることは、同じになることであり、他者との同一性を理解するという、他者によって既に理解されていること、としている。確かにアクタイオンは彼が出会った、そして殺害した鹿の本質を授けられ、鹿になる。出会って知るということはこちらが相手によって変容させられるということである。

しかしその前に神話で語られることは、女神が水を汲み上げることやアクタイオンの勇ましい顔に水を浴びせかけ、髪の毛にも仕返しの水をぶちまけることである。身体の論理としては、圧倒的な受け身性である。これはニンフたちの悲鳴に貫かれ女神に圧倒されて、おそらく身動きが取れない身体となって以降の、されるがまま、である。それで、女神はアクタイオンに長命の鹿の角を授けたのである。身体の論理としては、遅まきながらここで漸く、狩人という仕事の後のアクタイオンは、自ら成せる狩りという鹿の殺害の後に、鹿の女神に出会い、鹿になるという論理にリアリティを感じるようになる。つまりここでアクタイオンは、女神に出会い、自ら鹿になることで本当に鹿を獲ることを実現している。

(6) 解体

物語の最後をギーゲリッヒ（2018：367）は、自分の猟犬たちにバラバラに引き裂かれることなかで、猟犬たちは狩りの衝動であり、狩人という概念は心理学のことであり、狩人である自分が獲物という他者になることが、バラバラになるという他者性への溶解である、としている。知るという衝動によってその獲物はバラバラに解体されて、内容は解体され、残るのは一つの認識、つまり知ることによってバラバラに解体されるという視座のみである。物語の最もインパクトがある結末で、ここでのリアリティを出発点としてそれに根差すために最も重視されるべきリアリティである。

身体の論理では、鹿になることが本当に鹿を獲ることを自らに実現することであったのに対して、鹿として自らの猟犬という狩り衝動にバラバラに引き裂かれ

るということは、アクタイオンは自らの身に狩りを実現したことになる。つまり、女神アルテミスは鹿の角をアクタイオンに授けることで、アクタイオンの狩りという生業を実現したことになる。

4. まとめ — 口の中でとろかすことと現象に浸ること

ギーゲリッヒ（2018：290）は神話を思考する際に「口腔内での消化という隠喩」を用いて、神話が自ずから解体し自ずから展開するのに任せることを勧めている。優れて身体の論理である。また、真理に触れる現象についても、魂の生きる論理的な命に触れることは、水に「没かる」に等しいと言う（ギーゲリッヒ2018：332）。これも優れて身体の論理である。ここでのリアリティを心理学という止揚された論理に回収し実現することが目的であれば、考えることの論理の飛翔がここでのリアリティの本質を実現しているのは必然である。その際は、止揚される前の身体状況も思考の論理に回収される。

しかし、その思考の論理の表現が優れて身体の論理である。身体の論理は思考の論理と違って飛翔できないゆえに、語りのリアリティから離れるわけにはいかないことが限界である。と同時に、思考の論理であってもそれを語る際に強みをもつのは身体の論理である。このことが、思考の論理と身体の論理の対比によって判明したことである。

文献

Giegerich, W. (1998/2008). *The Soul's Logical Life. Towards a Rigorous Notion of Psychology. 4., revised edition.* Peter Lang. Frankfurt am Main. 田中康裕訳 (2018/1998). *魂の論理的な生命 心理学の厳密な概念に向けて*. 創元社.

(2019年2月4日受稿, 2019年2月19日受理)